

かめのり大学院留学アジア奨学生
月次報告レポート
(2018年9月)

■研究内容：日大全共闘の記憶を「大衆知性」の記録にとどめる

2017年に「日大闘争を記録する会」いわば日大全共闘は、みずから日大闘争関連の資料を整理し、「国立歴史民俗博物館」に近現代日本の「社会運動資料」として寄贈した。その量はおよそ段ボール40箱、合計約15000点におよび、日大生11学部分にくわえて教職員組合、教授会、大学当局の闘争関連資料、裁判記録などが含まれている。これらは、東大闘争やベ平連とともに1968年の時代が基盤になった歴史研究の材料として保存されることになったのである¹。

このように、日大全共闘にかんする大量の資料が歴史研究の対象として本格的に取り上げられるようになったことは大きな第一歩であろう。半世紀を経て、ようやく日本戦後史のなかで1960年代以降の歴史像が再構成されるようになってきたからである。ただし、紙媒体の資料も重要でありながらも、全共闘の当事者が今を生きる人としての証言であることを忘れてはならない。確かに、日大闘争を経験したかれらが、1968年の記憶をふりかえって語ることはしばしばあった。しかし、マス(Mass)的な存在だったにもかかわらず、日大闘争が本格的に記録されるようになったのは最近のことである。当時、大幅に2万人の学生たちが声を出して大学当局に対して異議を申し立てたわけであるが、1968年のメモワールについて言いあらわす人は限られていた。そのため、日大闘争を記録する会が「日大930の会」という名称をつくり、矢崎薫全共闘副議長をはじめとして日大全共闘について理解するため、さらに深く追求する記録作業を進めることになった。日大闘争のあらゆる記憶を抱えている仲間たちに呼びかけを行い、ついに2011年、『日大闘争の記録—忘れざる日々』の刊行が始まったのである。

1968年の時代における全共闘の運動という出来事は、ある者にはノスタルジーであり、他の者にはトラウマであるかもしれない「個人」の記憶そのものである。日常生活のなかで突然起こった一つの出来事にすぎないと思われ、あえて想起しない、語らない、書き残さない選択肢を選んできた場合もあるのだろう。ところが、だれかのストーリーだったものは、実はわれわれのヒストリーとして立ち現れてくるのである。それゆえ、「日大930の会」は、当事者の仲間たちを、日大闘争にたいする膨大な量のメモリーの檻から解放させるために、

¹ 三橋俊明(2018)『日大闘争と全共闘運動—日大闘争公開座談会の記録』彩流社 14頁

呼びかけ続けていると考えられる。

これをもって、(9月28日の締め切りだった)東京外国語大学の海外事情研究所の雑誌『クアドランテ』21号の研究論文として『忘れざる日々ー日大闘争の記録』を一次資料として扱いながら、日大全共闘が1968年の思い出を文章として書きしるすため、どのような語り方を選択しているのかに着目する内容を投稿したつもりである。そして1968年に「日大全共闘に成」り、日大全共闘はもちろん、全共闘運動を歴史化せざるをえないという責任下で執筆活動を活発に続けてきている、三橋俊明の著作を通じても論じた。

さらに、「日大全共闘は大衆知性としての個人であった」ことについて考察するために、日大全共闘における「大衆知性」を二つの観点にわけて論じた。一点目にかんして、半世紀前の日大全共闘の学生たちは、「大衆知性」の様相を呈した初めての存在であった。かれらは、大学当局にたいして改革を唱える過程で、どのようにして「大衆知性」となっていったのか、その発端を明らかにする。二点目について、日大全共闘は今日もなお、現代の「大衆知性」として、全共闘の歴史を書き残そうとしている。しかし、かれらの物語は、当事者以外の誰かによって描かれてきたために、過激な学生たちが起こした政治的紛争として、忌避したいものとして取り扱われてきた。こういった偏向したイメージは、どのようにして固定化されてきたのだろうか。今日の全共闘にシンパシーを感じられない語り、誰によって、どのように形成されてきたのかを考察した。

■不安な留学生生活を励ましてくれる存在、かめのりファミリーと「鹿児島」にて

今回参加させていただいた二回目の夏の研修交流会は、9月9日から11日にかけて三日間行われました。場所は、昨年の広島と同様に日本歴史としても有名な観光地の「鹿児島」でした。明治維新100周年ということで、日本近代史の中心背景地だともいえる「薩摩番」とその武士たちは、非常に注目されていると思います。そのなかでも、上野公園にも銅像としてたてられている西郷隆盛は、現在でも愛されている歴史人物でしょう。私の専門は、戦後日本史・日本運動史ですが、広範囲に日本史を研究しておりますので、由緒のある場所の「鹿児島」に直接訪れたことは非常に貴重な経験でした。

私は、九州のいくつかの地域(たとえば、福岡と大分)に行ったことはありますが、鹿児島は初めてでしたのでとても楽しみにしておりました。初日、朝早く鹿児島発飛行機に乗るために羽田空港でかめのりファミリーの皆さんと待ち合わせすることにしました。しかし、向こうの鹿児島は、雨が降っていることはもちろん霧で視野が見えない状態の天気ということでした。そういうことで、もしかしたら到着地が広島空港になる可能性が高く、着いたらバスで鹿児島まで移動するというお話を聞きました。一日目は、鹿児島を観光すると予定が決まっていたので、私を含めて皆さんも残念そうに思いましたが、その前に無事に到着するという安全の問題が第一だと考えていました。一緒に不安を抱えながら揺れる飛行機のなかで心配していましたが、ラッキーなことに安全に鹿児島空港に着くことができま

した。そして、弱めの雨が降っていただけでしたので、鹿児島バス観光も楽しく回れました。最も印象的だったのは、ガイドさんの丁寧で親切な説明でした。鹿児島という地域を心から愛していて、ほかの人たちにもその良さを分かってもらいたいという気持ちが伝わってきました。おかげさまで、仙巖園と桜島の風声のある景色を存分に味わえました。鹿児島の独特な方言、西郷隆盛をせこどんと称するという事などを通じて、知らなかった地域の特色を理解することが大変勉強になりました。

引き続き、今年の日程にはなかったフリーディスカッションが行われましたが、お互いに抱えている留學生活の悩みを話せるチャンスが与えられました。同じ立場の留學生であるからこそ、誰よりも理解しやすく共感できる暖かい「場」になった会議室でした。

二日目と三日目は、いよいよ研修交流会の肝心なところだといえる奨學生たちの研究発表、そして西田先生の特別講義と姜先輩のミニ講義が行われました。皆さんそれぞれの発表はもちろんそのなかでなされる議論も私にとって貴重な経験でした。同じ分野の研究テーマではなくても、相互に意見を交換するという行為は、今後研究員または教員になるわれわれに、「勉強」そのものになりました。私は、研究する仲間から感想・コメントを言うてもらうことは嬉しいことだと常に思っており、夏の研修交流会の第一の思い出になりました。

皆さんの発表すべてが印象深かったですが、李さんの「みんながやらないから自分がやる」という研究にたいする心得を聞いて、感激しました。その理由は、研究テーマにおいても「流行」いわば「トレンド」という流れがありますが、私の研究テーマである「全共闘」そのなかでも「日大全共闘」は、いわゆる人気のある題目には入らなかったためです。にもかかわらず、研究し続けてこられた背景には、「だれもがやらないし、私にとっては面白いから」という心からの熱意があったのでしょうか。

次には、西田先生と姜先輩の講義を通じて感銘を受けました。将来的に、研究課程を終えたらわれわれは、どうなるのか。計画を立てていても本当に自分の目標に達成できるのか。こうした研究者として生きていきたいかめのみファミリーのために暖かいアドバイスを聞きました。お二人の講義を聞いて、今後自分が研究していくために、「勇気をもってさまざまな研究活動（あらゆる場所での研究発表や論文投稿）を挑む必要がある」こと、そして「覚悟をして行動をし」なければならないということに気づきました。

日本留學生活は、これからも不安でいっぱいです。しかし、「鹿児島」でかめのみファミリーの空間を通して、みずから生活基盤を築きながら、自分を「育つ」ことをあらためて学びました。この度もとても貴重なお時間をありがとうございました。

来年の夏の研究交流会もとても楽しみです。